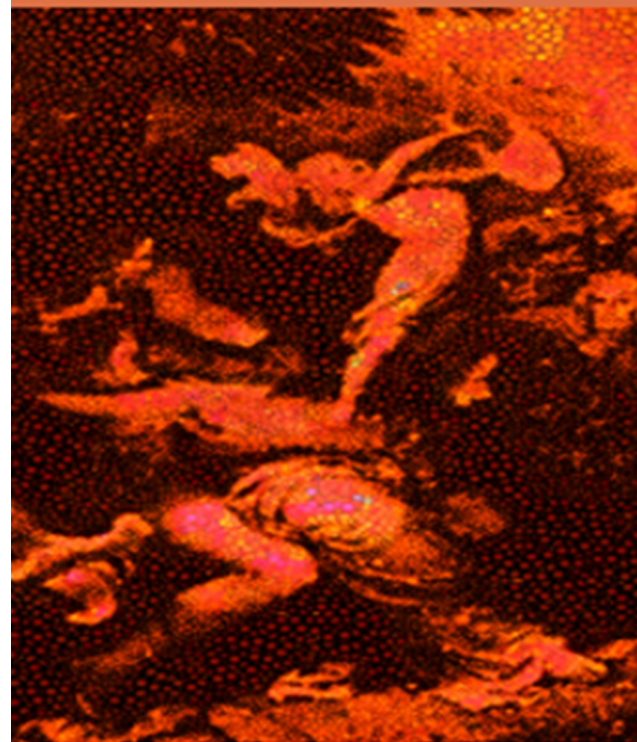


FAUST・2



戯曲「ファウスト第二部」
下

正道 SEIDOU

目次

戯曲「ファウスト第二部」下

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第三幕

12 スパルタにあるメネラオス王の宮殿・・・・・・・・5

13 城の中庭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

14 断崖の底の平和な土地・・・・・・・・9

第四幕

15 高い山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

16 皇帝の陣営・・・・・・・・・・・・・・・・18

第五幕

17 打ち開けた土地・・・・・・・・21

18 ファウストの宮殿・・・・・・・・23

19 深夜・・・・・・・・25

20 宮殿前の広い庭・・・・・・・・28

21 高い空・・・・・・・・30

あとがきと付録

おわりに・・・・・・・・34

国民感情のコントロール？・・・・・・・・36

戯曲「ファウスト第二部」下

はじめに

この下巻には「ファウスト」の第三幕から第五幕までが、短縮して収録されています。ただし第四幕の要約というか省略化には、読者として、多少強引なものが感じられるかもしれません。

なぜならそこでは、この幕のメイン・キャラクターと言ってよい「三勇士」が自己のセリフを持たずにいるからです。具体的には、喧嘩男、早取男、握り男の三人ですが、正直言って、私はこの三人があまり好きではないのです。

総じて彼らは、あまりに漫画的な性格で、芸術的な香りを全く持っていません。そのため彼らが登場すると、読者としての私のなかで『ファウスト』の品格が一気に落ちるような感じがするのです。

別の言い方をすると、まずもって私は『ファウスト』の第二部を読んでいると、まるで夜の夢を見ているような精神状態になるのです。夢幻の状態とか、夢現の状態と言ってもいい。ところが第四幕にいたると、それが急に中断されてしまう。

第五幕に入ると、再び夢の世界へと入っていきけるのですが、それだけに第四幕の異質性は、覆うべくもないものとなります。

そのような訳で、本書における第四幕の分量は、オリジナルの分量からすれば少ななまでに少なくなっています。読者にあつては、居心地の悪い「バランスの悪さ」を感じるかもしれませんが、右の理由により、どうかご容赦願いたいと思います。

第三幕

12 スパルタにあるメネラオス王の宮殿

トロイヤ戦争から帰ってきたヘレナ——つまりパリスやデーイポボスと結婚し、死別し、そのうえでメネラオス（最初の夫）によって、ギリシアへ連れ戻されたヘレナがいる。彼女のまわりには、捕虜奴隷として連れてこられた、トロイヤ人の女たちが大勢いる。

ヘレナ（震えながら） 恐ろしい……恐ろしい。

ベータ（捕虜奴隷を率いる女） ヘレナさま、恭しく貴女に仕えている私たちに、貴女の身にいったい何があったのかを教えてくださいませ。

ヘレナ お前たちも見て知っているように、この巨大な城塞のなかは、もともと全体的に薄暗くなっています。

ベータ ええ。

ヘレナ そうした薄暗さのなかで、私が竈の傍まで近づいた時のことです。灰の残り火に照らされて、あるものが見えました。すなわち、異形の大女が、床にうずくまっているのが見えたのです。

ベータ 大女ですって？

ヘレナ ええそう。その女は、痩せて背が高く、目が落ちくぼんでいます。なおかつ、人の気分を取り乱させるような、そうした不穏な雰囲気をもっているのです。

〔ヘレナが見た大女であるところのフォルキュアス（メフィスト）が捕虜奴隷たちの前に現れる〕

フォルキュアス（低い声で） ヘレナさま、高貴なあなたは、そうして無為に立ちすくんでいてもいいでしょう。けれども捕虜奴隷たちには、主人から、何か命令が下されていたのではありませんか。

ヘレナ（ハツとして） そうだわ、お前たち、メネラオス王のお指図どおり、生贄儀式のための支度をしなさい。

ペータ いえ大丈夫です。すでに何もかも用意してありますから。鉢も香炉も鋭い斧も。そそぐ水も、くゆらす香木も。でも何を生贄になさるのでしょう。

ヘレナ 何かは、王様が仰らなかった。

フォルキュアス 仰らなかった？ それはそうでしょう。なにせ女王さま、あなた様こそが生贄なのですから。

ヘレナ 私が？

フォルキュアス それと、ここにいる女たち全員が、斧で首を切られるのです。メネラオス王を裏切り、二人の男と結婚した咎が、今こそ完璧に報復されることになる。王の怒りは、すべての捕虜奴隷を屠るまで鎮まることがありません。

ヘレナ 恐ろしい。でも薄々感づいてはいた。みじめだわ。

フォルキュアス だが落ち着きなさい。助かる手がない訳じゃない。すべてはお妃さま次第なんです。まあ、そのためには早急なご決心が必要なんですが。

ヘレナ と言うとうと？

フォルキュアス 順を追って言いますと……まずタイゲトス山の背後に、いつの間にか、ある北方の種族が住み着きました。あなたの知らない、ゲルマンという大胆な種族です。彼らはそこに、よじ登ることも出来ないような堅固な城を築き、そこを拠点にして、周囲の地域を襲うようになったのです。

ヘレナ そんな情勢は知らなかったわ。

フォルキュアス 事の始まりから数えると、かれこれ二十年にもなりましょう。

ヘレナ その国は、数人の諸侯が統治しているの？ それとも一人の王が統治しているの？ しつかりとした盗賊団のようなものなの？ 荒くれ者たちが徒党を組んでいるだけなの？

フォルキュアス 盗賊団では言い過ぎでしょう。ただの荒くれ者たちの集団でもなく、むしろ、ある程度の紳士の集まりと言っている。そして彼らの頭領は一人です。じつは私も、彼らゲルマンたちに襲われた事があるのですけれど、だからといって、その頭領を悪く申したりはしません。

ヘレナ それはどうして？

フォルキュアス そのとき彼は、何もかも奪うことが出来た。そうであるのに、少しばかりの献納品で満足してくれたからです。

ヘレナ その方、具体的には、どんな様子の男性ですか。

フォルキュアス 悪くありませんよ。快活で勇敢で姿がよい。ギリシア人には見られないほど、物の分かった人です。それにあの城といったら！ 女王さまも、ご自分で御覧なさいまし。そこには大円柱、大きなバルコニーや回廊などがございます。

ヘレナ それで結局、お前はどちらしろというのです。

フォルキュアス それはあなたが、ご自身の口を使って仰るべきことなのです。そう、本気で「彼が好ましい」と口になさい。そうすれば、私がすぐ、あの方の城にご案内いたします。

捕虜奴隷たち ヘレナさま、どうぞ、その短い言葉を仰って、ご自身と私たちをお救いくださいまし。かのゲルマンの頭領に、メネラオス王の怒りから匿ってもらうのです。

13 城の中庭

中世時代の豪華な城塞に囲まれている中庭にて。

ペータ あの大女、あやつの姿が見えません。

ヘレナ 彼女が、英雄王に私の来着を告げ、歓迎の準備をさせに行ったのならありがたいのだけど。彼女の主君のところへと、早く私を案内してほしい。私はさすらいを終えて、ここで休息したいのです。

ペータ でしたら御覧あそばせ。早くも大勢の家来たちが、忙し気に、あっちこっちへと動いているのが見えます。あれはきつと、慇懃丁寧に賓客を迎えるための準備ですわ。

ヘレナ ああ、そうなのね。

捕虜奴隷たち　お妃さまは既に、家来たちに招かれて、立派な椅子に座られた。私たちは挙げて、このような歓迎を祝福しましょう。

「家来たちが長い列をつくって降りたのち、ファウストが現れて、ゆっくりと階段を降りてくる。ファウストは中世騎士の宮中服を身に着けており、なぜか背後に、縄で縛られた男を従えて歩いている」

ベータ（ファウストを見て）なんて素敵なのかしら。私も評判のいい方々を大勢見てきましたが、この方は、その中の誰よりも優れておいでだわ。それにしても、いったい誰を縛って連れてきたのでしょうか。

ファウスト（ヘレナに向かって）気高い女王よ、これなる咎人は、珍しいほど眼がきく男なので、私が見張り役を申し付けていた者です。具体的には、高い塔から四方を見張る役を任せておりました。

ヘレナ　あら、見張り役の方でしたか。

ファウスト　ええ、見張りとして、実に能力の高い家来ではあるのです。ところが今日に限っては、何という怠慢を仕出かしたことでしょう。よりにもよって、この男は、あなたのお越しを、私に知らせなかったのです。それにより、最上の賓客に対する御もてなしを、あやうくご破算にしました。

塔守リユンコイス（＝見張り番）告白します。まばゆいまでの美しさが、哀れな私の目を大いに眩ませました。私は番人の役割を忘れ、ただあなた様に見とれてしまっていたのです。女王さま、どうか私を殺せと仰ってください。あなたの美しさが、私の生への未練さえ忘れさせるでしょう。

ヘレナ　私のために生じた過ちを、私が罰することは出来ません。いえ、私としては、ただただこの身が呪わしいばかりです。どこへ行っても私は、殿方たちの心を惑わしてしまうのです。ですから王よ、私に免じて、この善良な囚われ人を釈放してあげて下さいませ。

ファウスト　私に、あなたの言葉に逆らう力などはありません。それどころか、私自身はもとより、これまで自分のものと錯覚していた一切を挙げて、あなたに献じる以外に、私のとるべき道はないのです。

ヘレナ　そんなに遜りなさるなんて、急にどうしたのです？

ファウスト　いま私は、あなたの足元に跪きます。その上で、あなた様を私の主君として仰がせてください。あなたの美しさは、ここへ来られると同時に、財産も王座も、わが物とされてしまったのです。

ヘレナ　あなたとゆっくり、お話がしとうございます。どうぞ私の傍にお座りください。それによって、私の席もまた安泰になります。

ファウスト 私が話すべきことは一つです。私を、あなたの国の共同統治者として、お認めください。あるいは崇拜者と、しもべと、番人とを、一身に兼ねる者として、お認めください。

ヘレナ 喜んで認め、私もあなたのものとなりましょう。

ファウストとヘレナ（声を合わせて）いまや過去も未来も心がない。ただ現在のみが私たちの幸福。

捕虜奴隷たち 早くもお二人は、近寄って、お互いに凭れあっていらっしゃる。肩と肩、膝と膝を寄せ合い、手に手をとって、王座の上で一つになっておられる。ぜひ皆で、お二人を祝福いたしましょう。（その場が歓呼の声で包まれる）

14 断崖の底の平和な土地

数個の洞窟が並んでおり、その洞窟に寄せ付けるように四阿（あずまや）が建てられている。この土地のぐるりは、鋭い断崖によって取り囲まれている。ときは早朝。ファウストとヘレナの姿は見えないが、彼らの家来衆（かつての捕虜奴隷である女たち）は、そこで平和そうに眠っている。

フォルキュアス タベここに到着したお前たち。疲れて眠ってしまったんだね。でも、もう朝なんだ。寝ぼけ眼を開いて、私の話を聞きなさい。

家来たち なら聞かせて。とても信じられないようなことを。こんな岩ばかりの場所を眺めているのは、あんまり退屈なんだから。

フォルキュアス ようやく目を開けたら、もう退屈するのかい。ではお聞き。あそこの洞窟には、牧歌に出てくる恋人同士のように、お前たちの王様とお妃さまが隠れ住んでいるんだよ。要するに「二人だけの世界」というやつさ。

家来たち そこにあなただけが呼ばれて、一人こっそりとご奉仕されていたのね。まるで、そこには全世界があるようなお話。

フォルキュアス ああ、じっさい洞窟の中には、アルカディアの野のように静穏充実な世界があった。実に安らぎに満ちた世界がだ。ところが、そこに突然、高音の笑い声が響き渡った。見ると小さな男の子

が、奥方の膝から殿方の膝へと飛び移っているじゃないか。

家来たち わあ、お二人に子供が生まれたのね！

フォルキュアス そう。その子はまるで、翼のない小天使のようだった。そして膝から膝へと飛び跳ねているうち、勢いづいた男の子は、ついに飛び上がって洞窟の天井に触れたんだ。

家来たち そんなに高く跳ぶようになったの？

フォルキュアス ああ。それだから母親は心配して叫んだ。「何度でも好きなだけ跳ねなさい。でも大きく飛んでいくのは駄目。自由に飛ぶことは許しません」

家来たち 母親からすれば、それは当然の言葉だわ。

フォルキュアス だが子供は、それでも飛んだ。大いに飛んだ。そうして険しい岩の裂け目に姿が消えてしまった。

家来たち まあ！

フォルキュアス 私も、もう助からないかと思った。母君は嘆き、父親は慰める。だが子供は、同じ裂け目から降りてきたんだ。だが何たる現れ方をしたもののか。

家来たち どんな姿で現れたというの？

フォルキュアス 裂け目の先に空洞でもあって、そこに宝が隠されていたのだろうか。驚いたことに男の子は、花模様の衣装で、立派に自分を着飾っていたんだ。そのときの少年の顔の輝きようと言ったら！

「ここでファウストとヘレナ、およびオイフォーリオン（二人の子）が洞窟から出てくる。家来たちは憧れの眼差しで、この聖家族を眺める」

オイフォーリオン（両親に）子供の歌声を耳にすれば、あなた方の親心が躍ります。

ヘレナ 愛は気高い二人を寄り添わせます。けれど神のような歓びを与えるために、愛は貴重な三人組をつくるのです。

ファウスト かくして全ては揃った。これが変わるようなことは、今後あってはならない。

オイフォーリオン さあ、ここで僕を跳ねさせてください。どんな空中へも、おし昇るのが僕の願いです。ファウスト そんな無鉄砲はならぬ。向こう見ずなことをして、落ちたり怪我をしたりしてはならぬ。そんなことをして、大切な息子が、私たち家族を破滅させてはならぬのだ。

オイフォーリオン でも、これ以上、地上に張り付いてはいられません。僕の手を放してください。僕の着物を放してください。

家来たち（聖家族を見守りつつ）……この三人の輪が、じきに壊れやしないか心配になるわ。

ヘレナ 我が子よ、どうか気持ちを抑えて。そのあまりに活発な衝動を、両親のために抑えておくれ。

オイフォーリオン もうすでに、あなた方を慮って、僕は自分を抑えています。いっそ、家来たちとダンスでも踊って、この憂さを払いましょう。（家来たちとダンスする）ああ楽しい。

ヘレナ そう、それでよろしいのよ。

オイフォーリオン（苛立つて）ああ、もう無理だ。たやすく手に入れたものは、ちっとも僕の心を動かさない。無理に手に入れたものだけが、本当に嬉しいのだ。（暴れ出す）

ファウスト なんとという我がままだ。なんとという暴れようだ。まともな抑制などは、とても望めたものじゃない。

オイフォーリオン 狭苦しい。ここは森の茂みの間に、岩が押し合っているだけの場所だ。こんな窮屈な場所にはいられない。（岸壁を昇っていく）

ヘレナ カモシカの真似でもしようというの。落ちやしないかと思ってハラハラしてしまうわ。

オイフォーリオン もっと高くへ上るんだ。もっともっと広く見渡すんだ。

家来たち そんなムキにならずに、この居心地のいい場所に、居心地よく暮らさないよ。

オイフォーリオン お前たちは平和を夢見ているのか。そうしたい者は、思い通りの夢を見るがいい。けれど僕は、もう目ざめている。戦争、これが合言葉だ。そこに「勝利」と続いて響くのだ！

家来たち みんな上のほうをごらん、あの子は、なんと高く上ったことか。あら、あの子ったら、なぜか

鎧を着てる。勝ち戦に出かけるようだわ。

オイフォーリオン 人民よ、征服されずに暮らしたければ、速やかに戦場に行け。子供はすべて勇士となれ。さあ行こう戦場へ。私たちの前には、誉れへの道が開いている。

ファウストとヘレナ では私たちは、お前にとって何でもないものなのか。楽しいまどいも夢なのか。

オイフォーリオン 平和など夢です。戦いが天命であり、死ぬことが宿命なのです。それは分かり切ったことです。

ファウスト なんと恐ろしい、気味の悪いことを口にするのだ。まるでお前が死んでしまうようではないか。

オイフォーリオン どうしても行かなければ！ 遠くまで飛ぶのを許してください。

「岸壁の頂上ちかくから、オイフォーリオンが、中空に向かって身を躍らす。オイフォーリオンの頭部が光を放ち、その光が下降線を描く。そのまま少年は、両親の足元に墜落する」

ファウスト（震えながら） 歓びのあとを追って、すぐに恐ろしい悲しみがきた。私たちは息子を失ってしまった。

地底からのオイフォーリオンの声 母さん、僕をたった一人で、暗い国におかないで！

ヘレナ（ファウストに） 私は辛いお別れをいたします。もう一度、あなたの腕に抱いてくださいまし。冥府の女王よ、息子と私とをお引き取りください。

「ファウストが戸惑いつつヘレナを抱くと、彼女の肉体はすっと消え失せる。ヘレナの衣装とヴェールだけがファウストに残される」

ファウスト なんとという結末だ！

フォルキュアス（ファウストに） あなたの手に残ったものを、しっかりと掴まえておきなさい。それだって神々しいものです。その気高い恵みの力を借りて、上へ上へとお上りなさい。

ファウスト どういうことだ？

〔ヘレナの衣装は溶けて雲となり、問答無用に、ファウストを包んで空たかく持ち上げる。雲はギリシアから離れて、どこかへと飛んでいく。フォルキュアスは、老婆としての仮面と衣装を背後にはねのけて、メフィストとしての正体を現す〕

第四幕

15 高い山

巖々として屹立する岩の峯。そこに一塊の雲が飛んできて、台のようになっていいる部分の上へと降りる。雲の中からファウストが現れ、雲自体は、上空に昇っていく。

ファウスト あらゆる土地、あらゆる時代を、あの雲は私を包みながら旅してくれた。だが、この山に私を降ろした乗り物に対し、私は今こそ暇をやろうと思う。雲よヘレネよありがとう。

〔雲が消えると同時に、ファウストの隣にメフィストが現れる〕

メフィスト（ファウストに） あなたも物好きですな。こんな何もない、岩だらけの山に降りるなんて。

ファウスト これまで、雲の中から見るべきものは見てきた。今はむしろ、何もない場所で、気持ちを「ゼロ」にリセットしたいと思ったのだ。

メフィスト そいつは勇壮なことです。とはいえ、もともと満足というものを知らないあなたのことだ。食指が動くような情景も、結局は、何も見つからなかったんでしょう。

ファウスト ところが、あるんだ。あるものが私の心を惹きつけた。それが何か当ててみるがいい。

メフィスト それは訳もないことです。蟻のようにうごめく群衆の中心に立って、数万の人たちに崇められるという情景でしょう。

ファウスト（笑って） そんなことで私は満足しやしない。

メフィスト そういうことを考えるのは疲れたということですか。ではこうですか。安楽な小宅を構えて、そこで気の置けない人たちと末永く、水入らずのしんみりとした月日を送るなんていう。

ファウスト それは趣味の悪い現代式だ。

メフィスト では逆に気宇壮大を極めて、月まで行ってみたいとでも？

ファウスト 大違いだ。この地球にはまだ、偉大な仕事をなすに十分な余地がある。かつ私には、そこで、ひたむきな努力を行うだけの力が残っている。

メフィスト では孤高の偉人という名声を得ようというんですね。

ファウスト それも違う。正解は「支配権を得たい」だ。それと所有権も。事業そのものが全てで、名声などは空虚な響きにすぎない。

メフィスト はあ、そうきましたか。

ファウスト 率直に言おう。雲の中にあつて、私の目は、はるかな海原に引きつけられた。それは膨れ上がつて、波を逆巻かせて、広く平たい岸边に襲いかかる。それが私の癪に障つたのだ。

メフィスト 癪に障つた？　　というあなたは、波による陸の浸食を怒っておられるんですか。そんなことは、何十万年も前から続いていることですよ。

ファウスト そう何十万年もだ！　非生産的な波は、その非生産的な性質を、いたるところに拡げようとしている。まさに抑制を知らぬ無目的な力だ。そこで私の精神は、自分の力に余ることを敢えて企てる。波と戦いたい。海原を再征服したいと。

メフィスト つまりは、海岸の埋め立てによる、レコンキスタ（再征服）という訳ですか。

ファウスト まさにそうだ。あの横暴な海を岸から締め出し、波を遠く、海の奥へと追い立てたい。そういう貴重な勝利を得たいのだ。これが今の私の願いだ。君はこの事業を始めるための段取りを、今すぐやりだしてくれ。

メフィスト いとたやすいことです。おあつらえ向きの、太鼓の音も聞こえてきました。

ファウスト 太鼓の音？　ああ確かに聞こえる。これは進軍太鼓だな。またしても戦争か。賢い人間は、この音を聞くことを好まないよ。

メフィスト いえいえ、戦争だろうと平和だろうと、等しく重要な「機会」なのです。その機会から、自分の利益を引き出すことが、何より賢明なのです。今ここに機会は訪れました。さあファウスト先生、これをしっかりと掴まえないさ。

ファウスト そんな言葉では分からない。掴まえるとは、手短に言えばどうなのだ。はっきり言ってくれ。

メフィスト 無粋な人ですな。えー、ここに来る前に小耳に挟んだことですが、かの皇帝が困ってるそうなんです。つまり私たちが世話をしてあげて、偽の富を握らせてやった人ですね。あの頃は、ヘレナとパリスを現世に呼びつけるほどの勢いがありましたけど。

ファウスト ああ、あのときの皇帝か。

メフィスト その皇帝なんですが、なにしろ若くして王位に就いたものだから、浅はかにも、統治と享樂とが両立すると考えたんですね。でも、誰にでも分かるとおり、そんなのは土台無理な話です。そして、そのチグハグな治世によって、城と城、町と町、組合と貴族とが反目していきました。

ファウスト それでは、人心が、皇帝から離れていってしまうだろう。

メフィスト まさしく。中でも立派な人たちは、実力をもって蜂起して言いました。「我々が新しい皇帝を選んで、新しい国に魂を吹き込んでもらおう」とね。

ファウスト ああ……

メフィスト そうして反乱は広がり、いまや戦争の形式にまで行き着きました。私たちが機嫌をとった皇帝は、最後の決戦をするために、ここに陣を進めてきたんです。

ファウスト いたわしいことだ。気持ちのよい、打ち解けた方だったか。

メフィスト そのようにシンパシーを持っているならば、なおさら皇帝を、眼下の谷から救いましょう。ええ、ここで一度救えば、千度救ったのと同じだけの価値があります。

ファウスト 何を言いたい？

メフィスト 皇帝が勝てば、あの方の重臣にだってなれるということです。そうすれば、あなたの望みを通すことだって簡単に出来るはずです。

ファウスト 少しばかり、話が急すぎるような気もするが。

メフィスト 急でも何でも腹を決めてください。皇帝に王位と国土とを保障してやれば、あなたは重臣として、はてしない海岸地帯を、封土として受領することが出来るんですから。

ファウスト では君に、ひといくさ勝ってもらおう。

メフィスト いや、あなたが勝つんです。今回は、あなたが上將軍です。でも実際の仕事は参謀部（私）に任せなさい。そうすれば將軍の身は安泰です。

16 皇帝の陣営

ファウスト、鎧をつけ、兜をかぶって、皇帝の前にかしづく。彼の後ろには、メフィストが用意した三人の勇士が、ファウスト同様に、皇帝に対してかしづいている。

ファウスト（皇帝に）急に罷り出しましたが、お叱りはなかうと存じます。

皇帝 心配で心が折れそうなときに、味方として力強く駆けつけてくれる——そんな誠実な人間を、人はこの上もなく歓迎しなくてはならぬ。

ファウスト ご不快ではないということで。では、これなる勇士たちが、早速あなた様の隊列に加わります。彼らが、その勇猛な本領を発揮することをお許しください。

〔すでに戦端が開かれている会戦場に、ファウストの三勇士が加わる〕

ファウスト（遠くから眺めて）三勇士が戦い始めたたん、あたりが急に暗くなった。そこに、ただならぬ赤い光が、意味ありげに閃いている。岩も森も、大気も大空さえも、戦いに巻き込まれている。

皇帝（ファウストに）わしにも、あの勇士の一人が見える。はじめは腕を一本だけ振り上げていたが、それが今は十二本の腕に見える。これは自然にあり得ることじゃない。

ファウスト さすがに、それは眼の錯覚ですよ。

皇帝 それだけじゃない。別の一人の場合は、長い槍の穂先が、すべて稲光を放っているのが見える。これはあまりに妖怪じみていると思う。

ファウスト 陛下、あれは実は、この世から消えた神霊たちの名残なんです。古い聖霊たちの魂は、ここで最後の霊力をふり絞っているのです。

皇帝 不思議とは思いますが納得しよう。少々気分が悪いので、私は幕屋で休んでいる。

〔ラッパの音が鳴り、戦争の終了と、皇帝側の勝利が告げられる。皇帝が数人の侯爵と大司教を伴って登場〕

皇帝 何はともあれ、我々は戦いに勝ったのだ。敵は散り散りになって、野末に消えた。今回の戦いには幻術なども織り込まれたが、偶然のことが、戦う者に有利をもたらすことは、別に珍しいものではない。

大司教 アーメン。いやいや、神聖な王冠を戴く陛下が、悪魔と結託されているのは、私にとってはこの上ない苦痛でございます。それは、主なる神と、父たる教皇を侮るものでございます。

皇帝 本当のことを言うと、この重い過失のために、わしは痛く恐縮しておる。

大司教 お付きの者から聞いたのですが、陛下は、あの怪しげな男に、国の海岸地帯をお与えになったそうですね。

皇帝 うーむ、遺憾ながらそうだ。

大司教 アーメン。そうであるなら、もし陛下が懺悔心のもとに、あの土地からの十分の一税、献納金、収益などを、教会に寄付なさらないと、かの地は呪われた土地となるでしょう。

皇帝 その土地は、まだ存在していない。今のところ、遠浅の海の下で、広々と沈んでおるのだ。（小さく）それにしても、こうも教会がこうつくばりだと、わしは近々、国全体をも譲ることになりそうだわい。

第五幕

17 打ち開けた土地

海岸の埋め立て地。そこに一人の旅人が訪れる。

旅人 うん、あれだ。あの菩提樹の老木だ。こんなに長い旅の終わりに、またあの木を見ることがなったのだ。菩提樹の傍には、あの老人たちの住居と礼拝堂があるはずだ。嵐の夜、波が俺を砂丘に打ち上げたとき、俺を助けてくれたのは、人助けが好きな殊勝な夫婦だった。あの頃すでに年寄りだったから、今日会うことは難しいかもしれないが……

〔旅人、小屋の前に立つ〕

旅人 戸を叩こうか。呼んでみようか……こんにちは！

バウキス（非常に年を取った老婦。戸を開けて）旅のお方、どうかお静かに。いま連れ合いが寝ているんです。

旅人 お婆さん、あなたですね。まず私がお礼を申し上げるべきお方は。あなたが、半死半生の人間に、かいがいしく温かい飲み物を飲ませてくださったバウキスさんですね。

〔声を聞きつけ、寝ていたバウキスの連れ合いが登場する。その上で、旅人が彼を見る〕

旅人 あなたが、海中から私の宝物を引き上げてくださった、フィレモンさんですね。

フィレモン ああフィレモンだ。君のことはよく覚えているよ。

旅人 嬉しい……のですが、丁寧な挨拶を後回しにして、今は果てしない海を眺めさせて下さい。海を神と見立てて、跪き、再会の感謝を祈らせてください。実際私は、いま胸がいっぱいなのです。

〔小屋の傍に砂丘があるため、直接は海が見えない。旅人は、その砂丘を乗り越えてゆく〕

フィレモン（バウキスに）急いで食卓の用意をしなさい。あの人は、きっとしばらく走り回ることだろう。自分の目で見るものが信じられなくてね。

パウキス ええ、そうですね。

「やがて旅人が、砂丘の向こう側から帰ってくる。その旅人の隣にフィレモンが立つ。旅人は呆然としている」

フィレモン（苦笑しつつ、旅人に）あなたを散々な目にあわせた海が、今では花園に変えられて、楽園のような光景になっているのを見ましたね。

旅人 あれは一体？

「旅人とフィレモン、共に砂丘の上に登っていく」

フィレモン どう説明すればいいのか。ともかく、さる賢明な殿様の家来衆が、溝を掘ったり、堤防を築いたりしたんです。

旅人 何のためにですか？

フィレモン 彼らは海の権利を狭めていき、海に代わって、自分たちがこの地の主人になろうとしているのですよ。（指さしつつ）今ではあそこに港が出来ています。はるか遠くのほうに、ようやく海の青いへりが見えていますね。

「庭先に戻り、三人が食卓につく」

パウキス 本当に不思議なことでしたよ。この一件は、何から何まで、まともな事はひとつもありませんでした。

フィレモン 我々の砂丘からほど遠くないところで、彼らの仕事の第一歩が踏み出されました。ほどなくして、木立のあいだに御殿が建ちました。

旅人 ほどなくしてとは、どれぐらいの日数を指しているのですか。

パウキス 日数を数える間もありません。日中は、ご家来衆が無駄騒ぎをしているのに、夜分になって小さな炎が群れ集ったかと思うと、あくる日には、もうちゃんと堤防やら建物が出来ているんです。

旅人 それは不思議な話だ。なんだか気持ちが悪いですね。

パウキス でもね、私たちが困っているのはそこじゃないんです。もっとひどいことがあるんです。というのも、殿様は神をも恐れない人で、私たちの小屋や土地も欲しがっているんです。そういう人が隣で威張っているの、私たちは這いつくばっているしかありません。

フィレモン でもあの人は私に対し、新開地のうちに、いい地所をやろうと言っていたよ。

パウキス 埋立地なんか、あてになりませんよ。余生いくばくもないんだから、住み慣れたこの場所で頑張らましようよ。

フィレモン ともあれ、いまは礼拝堂のほうに行って夕日を眺めよう。鐘を鳴らして、跪いてお祈りしよう。昔ながらの神さまに、今後の平穏をお願いするんだ。

18 ファウストの宮殿

ファウスト、かつて飲んだ回春剤の副作用を受け、きわめて高齢の見た目になっている。思いに沈みながら、そぞろ歩きをしていると、丘の上で鐘がなる。

ファウスト（慄然として）呪わしい鐘の音だ。あまりに意地わるく俺を傷つける。

〔バルコニーから、鐘がなる方向を眺める〕

ファウスト そうだ。俺の立派な領地にも邪魔なものがある。菩提樹、小屋、礼拝堂。それらは俺のものではない。あそこで休息をとり気晴らしをしたいと思います。他人の影が俺をゾッとさせる。（不機嫌そうに、塔のほうに向かって）おいリュンコイス、まだ船は見えないのか。

塔守リュンコイス（海のほうを眺めて）五色の旗をたてた貨物船が見えてきました。何と喜ばしげに、港に入ってくるでしょう。

〔港の景色。メフィストの一行が、荷物を陸揚げしながら下船しつつある〕

メフィスト これで俺たちの腕前は実証済みだ。たった二艘で出ていったのに、港に帰ったときには二十

艘なんだからな。どんな大仕事をやったかは、積荷の量をみれば分かる。手荒な仕事ではあったが、結局、戦争と貿易と海賊とは、三位一体で分けられないんだ。

〔港に迎えにきたファウストに、メフィストが、チクリと一言物申す〕

メフィスト そんな難しい顔と、暗い目つきをして、あなたはご自分の幸運の話聞きなさるわけだ。

ファウスト なんだと？

メフィスト よく見なさい、陸と海との和解が叶ったのですよ。陸は喜んで海から荷物を受けとり、海は遠くへ荷物を運ぶ。そうして生まれるのが、貿易による巨万の富だ。あなたの高い見識と、家来衆の勤勉とが、海と陸との誉れを勝ち取ったのです。

ファウスト ところが、わが膝元こそが呪わしいのだ。自分の領地こそが、今や、たまらなく私を苦しめる場所になってしまったのだ。そこに私の心臓をチクリチクリと刺すものがあって、こここのところ、それを我慢することが出来なくなっている。

メフィスト それは一体何なんですか。

ファウスト 正直それを口にするのも恥ずかしいが、砂丘の向こう側に住んでいる老人たちが邪魔なのだ。彼らを立ち退かせ、菩提樹の生えているあたりも、この俺が、自分で自由に使いたいのだ。

メフィスト そんなの僅かな土地でしょう。

ファウスト だが、その僅かな土地が、俺の世界所有権を損なっているのだ。富貴の身なのに、自分に欠けたものを感じるほど、ひどく悩ましいことはない。

メフィスト はあ。

ファウスト 小さな鐘の響きと菩提樹の香りが辛い。あれらは、教会か墓の中にでもいるように俺を取りかこむ。何とかしてあれを俺の意識から追い払いたいものだ。あの鐘が鳴ると、じっさい俺は気が狂いそうになる。

メフィスト よく聞けばご尤もな話です。あの鐘の響きは、あらゆる高貴な人々の耳に不快に聞こえますよ。あの呪わしいブーン・ブーン・ブーンは、洗礼から葬式にいたるまで、あらゆる出来事のなかに入り込んでくる。そうして、まるで一生がブーンとブーンの間で、はかなく消えた夢のように感じさせるん

です。

ファウスト 加えて、鐘の音を聞くと、あの老人たちの面影が思い浮かぶ。彼らのような反抗と強情に出くわすと、どんな素晴らしい成功にもケチがつく。それが苦痛で、ついには俺の「正義を保とうとする心構え」も若干あやしくなる。

メフィスト なぜ遠慮なさるのです。さっさと彼らを、別の土地に移せばいいではありませんか。

ファウスト ではお前が行って、奴らを余所へ移してくれ。私は直接に関わりたくない。それに君も知っているはずだ。私が老人のために選んでおいた、あの立派な土地については。

メフィスト どうか任せてください。大丈夫、すぐに済みますよ。たとえ老人たちが少々暴力を受けたとしても、我々が気にするほどの事じゃない。ことが済んでしまえば、立派な住まいで埋め合わせがつくんですから。

19 深夜

ファウストの宮殿。塔守が、菩提樹が立っている方向を眺めて声をあげる。

塔守 リュンコイス かの菩提樹のあたり、暗い闇のなかに、火の粉が飛び散っている。折りからの風に煽られて、熱火はしだいに激しくなっていく。木陰の小屋からも火が噴き出した。助けが来なければ手遅れになるが、その救いの手は、残念ながら見当たらない。

〔リュンコイスの手が震え、声もまた震える〕

塔守 リュンコイス 何と恐ろしい災難だろう。すさまじく燃える地獄の中から、あの善人夫婦が逃げ出せばよいが。尖った炎が、もう木の梢に絡みついている。焼け落ちた枝の重みで、礼拝堂もつぶされた。幾星霜を生き抜いた老木は、この瞬間に滅んでしまったのだ。

〔バルコニーに出てきたファウストが、火事の現場のほうを眺める〕

ファウスト 塔のほうから、何たる悲嘆の歌が聞こえることか。俺の頭上で、塔守は泣いている。俺もこの火事には腹が立つ。だが……もうすぐ無制限に、自分の領土が眺められるようになるのだ。それに、あの老夫婦が転居する、新しい住まいも目に浮かぶ。

メフィスト（宮殿の入り口から、バルコニーのファウストに向かって）全速力で馬を走らせてきました。申し訳ございませんが、穏便には事が運びませんでした。こっちの言葉を、向こうが聞こうとしなかったんです。

ファウスト 何を言っている？

メフィスト それだから私たちは、さっさと老夫婦を追い払いました。二人は大して苦しむこともなく、驚いたあまり、そのままポックリ逝きました。そこに、一人の余所者が立ち向かってきたので、これも打ちのめしてやりました。

ファウスト だからお前は、何を言っているんだ？

メフィスト 真摯な報告ですよ。ええ、その刹那、炭火がまわりに散らばって、藁に燃えついたんです。するともう燃え放題。老夫婦と余所者たちは、たちまち火あぶりとなりました。

ファウスト ああ何ということだ！ 俺は土地の交換を望んだのであって、略奪などする気はなかったのだ。お前たちの性急な乱暴、傲慢な仕打ちを、私は心から呪ってやる。この呪いは、お前たち郎党で、残らず分け持つがいい。

〔メフィスト、不満顔を浮かべて退場〕

ファウスト（独白）取返しのつかない事になってしまった。急いで言いつけたことが、早まって実行されてしまったのだ。（何かに気づいて）あれ、何だろう、あの影のように漂って近づいてくるのは。誰かいるのか？

憂愁 そのお尋ねには、はいと答えるしかありません。

ファウスト お前は、いったい誰なのだ。

憂愁 ともかく、ここに來ている者です。

ファウスト どこかに行ってしまう！ ここは、お前のような者が来るべきところではない。

憂愁 いいえ、来るべきところに来ているのです。

ファウスト（初めは怒っていたが、やがて心を落ち着け、自分にむけて言う）俺は、ただひたすら世の中を駆け抜けてきた。いつも何かを熱望しては、それをやり遂げ、この生涯をやりとおした。はじめは威勢よく、いまは賢明に慎重に。

憂愁 あら、そうなのですか。

ファウスト 地上のことはもう知りぬいた。天上に昇る見込みなどありはしない。だからこれからは、残された日々を、ただ淡々と消化していけばいいのだ。これからだって苦も楽もあろう。だがそれもいい。結局俺は、どんな瞬間にも満足しない男なんだ。

憂愁 けれど、ひとたび私に掴まえられたら最後。その人には、全世界だって役に立たなくなります。永遠の暗闇が降りてきて、夜明けも日没も関係なくなります。外部の感覚は完全でも、内部に暗黒が巣くうのです。幸福も不幸も、ともに悩みの種となります。満ち足りながら、それでも飢えに悩むのです。

ファウスト 呪わしい幽霊め。お前は人類を、千度もそんな風に扱ってきたのだらう。ごく普通の日さえ、お前は苦悩と混乱へと変えてしまう。この呪いから逃れることの困難さを、俺は重々わかっている。憂愁 とどのつまり人間は、一生涯めくらなのです。ならばファウストさん、あなたも盲目になってしまいなさい。（ファウストの目に息を吹きかける）

ファウスト（盲目になって）夜が急に深まったらしい。だが心の中には、明るい光が輝いている。俺は考えていることを、今すぐ仕上げようと思う。

「まだ夜中なのに、盲のファウストが、まるで朝であるかのように振る舞う。呼び鈴を鳴らして大きな声をだす」

ファウスト 主人の言葉ほど重みのあるものはない。さあ家来たちよ、一人残らず寢床から起きよ。俺が立案したことを実現してくれ。シャベルや鋤を手取るのだ。すでに指示してある仕事を、すぐにやり遂げてもらおう。また海と波に逆らう堤防をこしらえるのだ！

20 宮殿前の広い庭

メフィストが監督となり、家来たちに穴を掘らせている。シャベルがカチカチと音を立てている。そこに宮殿から出てくる形でファウストが登場。彼は目が見えないため、戸の柱を手で探っている。

ファウスト あのカチカチという音は、聞いていて実に気持ちがいい。あれは俺が命じた仕事で、ちゃんと進んでいるという証拠の音だ。海は、厳重な堤防の向こう側で縮こまるのだ。おい監督。

メフィスト はい、ここに。

ファウスト 手を尽くして、人夫を集められるだけ集めろ。堤防づくりがどれだけ進んでいるか、毎日報告を怠らないでくれ。

メフィスト（声低く）俺の受けた報告によると、進んでいるのは、堤防づくりではなく、墓掘りなんだが。

ファウスト 俺の最後の仕事で、この干拓事業なのだ。俺は数百万の人々に、自由に住める土地を開いてやりたいのだ。そのような群衆を眺めながら、俺もまた自由な民として、彼らと共に住みたいと思う。

メフィスト へえ、それはそれは。そのときに目が見えてればいいですねえ。

ファウスト（自分の言葉に酔うように）そうになったら、瞬間に向かって、こう呼びかけてもよからう。留まれ、お前はいかにも美しい、と。この予感のうちに、俺はいま最高の時間を味わうのだ。

〔ファウスト死んで倒れる。死霊たちが彼を抱きとめて、地面に横たえる〕

メフィスト ついに言ったな「時よ止まれ、お前はいかにも美しい」と。どんな享樂にも幸福にも満足しなかったくせに、お前は、最後の空っぽな瞬間を、哀れにも引きとめようと願ったのだ。

死霊たち サタンさま、おめでとうございます。

メフィスト 手ごわい相手だったが、老いには勝てなかったという事なのだろう。老いぼれたファウス

トは、いまや砂の上に倒れているのだ。

死霊たち この男の時間は過ぎ去った。

メフィスト 過ぎ去ったとは馬鹿な言葉だ。過ぎ去るのと、きれいに無いのは、まったく同じこと。なら「初めから無かった」と言えばよい。それなのに「過ぎ去った」と言って、表面上は、何事かがあったかのように繕っている。だったら俺は「永遠の虚無」という言葉に軍配を上げるな。こっちのほうが誠実だと思う。

死霊たち そんなことより親分、死体がうつすら光ってきましたぜ。

メフィスト おおよ、魂が抜けだそうとしているんだ。早速こいつに、かつて署名した契約書を見せてやろう。お前の魂は、このメフィスト様のものになるんだとな。

死霊たち おめでとうございます。長年の苦勞が報われました。

メフィスト ところがだ。困ったことに、近頃では魂を、悪魔から横取りする手段が色々と出来ている。我々にとっては、ひどく不都合な時代になったのだ。お前たち、隣のようなのが光って出てこないか、この死骸の腰のあたりを伺っている。それが魂なのだ。羽のある蝶みたいなやつだ。天才というやつは、すぐに体から抜けたがる。

「ファウストの脱魂と呼応するかのように、上方から栄光の光が射す。天使たちが現れる」

天使たち のびやかに羽を広げよ。この魂を迎えるために。罪人を許し、塵に帰る者を、天界にて蘇らせよう。

メフィスト 調子はずれの声が聞こえるぞ。それが有難くもない光と一緒に、上のほうからやってくる。乙に澄ました天使どもが、これまでも、こんな感じで魂を横取りしていったんだ。

天使たち（メフィストたちにバラの花を撒きつつ）花よ咲け。春よ萌えいでよ。紅の花も、緑の葉も、憩えるものに楽園をもたらせ。

メフィスト（死霊たちに）花なんか勝手に撒かせておけ。奴らは雪みたいに花を降らせて、熱い悪魔を埋めてしまうつもりなんだ。いや違うな、この花びら、油か硫黄のように、首筋にベタベタついてくるぞ。俺の頭が焼ける。心臓も肝臓も焼ける。これは地獄の業火にまさる火だ。

〔メフィスト、苦しんでいたのが、急に安楽の表情を浮かべる〕

メフィスト 得体の知れぬものが、この体中に染み込んだのかな。俺ときたら、あの変に可愛い小僧どもが見たくて堪らない。いつもは憎んでいる悪たれ小僧どもだが、どうも今だけは可愛く見えてならん。おいキレイな子たち、お前たちも、魔王ルシフェルの一族なのではないか。

天使たち（メフィストの招きに応じて） ほら来ましたよ。なぜ後ずさりするんです？

メフィスト（憧れつつ怯えて） 俺はどうしたんだ。体一面が火ぶくれで、わが身ながら気味が悪い。まるでヨブみたいじゃないか。それに何だか気が遠くなる。

〔ファウストの魂を運びつつ、天使たちがスッと昇天する〕

メフィスト（周りを見回す） あいつらはどこへ行った。小童どもが出し抜けにやってきたと思ったら、獲物を掴んで、空へ逃げていきやがった。

死霊たち もう姿が見えません。

メフィスト つまり俺は、掛けがえのない宝を横取りされたんだ。骨折り損のくたびれ儲け。どんづまりで俺が落ち込んだ愚かさときたら、まったく並大抵のことじゃないや。

21 高い空

ファウストの魂を運びながら、天使たちが宙を漂う

天使たち 霊界の気高い人間が、いま悪の手から救われました。絶えず努力する者を、私たちは救うことが出来るのです。聖なる贖罪の女たち（マグダラのマリアなど）から授けられたバラの花が、私たちを助けて勝利を得させてくれました。

〔天使たち手にしているファウストの魂は、完全に無力な、胎児のような状態にある〕

天使たち この人は手始めに水子たちの魂に加わり、徐々に完成形へと成長していくのが良いでしょう。
(ファウストの魂を渡す)

水子たちの魂 僕たちは喜んで、この蛹の状態にある方を迎え入れます。おお、もう大層光っている。ならばもう今すぐ、この方を包んでいる繭を取り除いてしましましょう。(膜のようなものを剥がして)ほら、この方はもう驚くほど美しく、大きくなりました。

「ファウスト、壮年の男性として再生する。彼はマリアを崇拜する博士である」

マリア崇拜の博士(＝再生したファウスト)ここは自由に見晴らしがきいて、目を開いているだけで精神が高められる。おお、上空では女性たちが歩いている。その中央に、星の冠をつけた立派な方がおられる。あれは天の女王だ。

天使たち 博士よ、存分に女王を讃えなさい。

マリア崇拜の博士 神聖な愛の歓びをもって貴女に向かっていく魂を、どうか心より祝福してください。最も高貴な意味合いにおける処女、崇拜に値する母、私たちのために選ばれた女王、そして神々と位を同じくする御身よ。

「マリア崇拜の博士に仰ぎ見られている天の女王(聖母マリア)の傍には、かつてグレートヒエンと呼ばれた女の霊が伴っている」

グレートヒエンの霊(聖母に縋りつつ)むかし恋い慕った男性で、今はもう濁りのない方、あの方が帰ってまいりました。でも、まだ新しい日を眩しがっているようです。

栄光の聖母(グレートヒエンに)ほら迎えにいておやり。その人もお前に気づけば、ついて来ることでしょう。

マリア崇拜の博士(グレートヒエンに気づいて)悔いを知る優しい人よ、私をも、その高みへと引き上げてください。

グレートヒエン ええ、行きましょう。一緒に、栄光の聖母さまの御許へ。

神秘の合唱

時のなかで移ろうものは、
ひと時の映像に過ぎない。

現界では及ばないことが、
ここでは実現せられ、
名状しがたい理が、
ここでは成し遂げられる。
永遠にして女性的なるものは、
我らを引きて昇らせる。

——ファウスト
完

あとがきと付録

おわりに

アルベドで終わっている「ファウスト」

私は遠からず「ファウスト第三部」という作品を発信するつもりでいます。これはゲーテの有名な劇詩「ファウスト第一・二部」の続きになります。

どうしてゲーテの完成された——しかも代表作である——作品の続きなどを、私なんぞが発信するのか。それを訝る方もいるでしょうが、これは意外と私にとってマストな、つまり「何としても成し遂げなければならぬ」仕事なのです。

というのも、ゲーテが遺した「ファウスト第二部」のクライマックスは「アルベド」の情景によって結ばれているからです。

白化と訳され、月や銀によって象徴されるアルベド。それは錬金術のオプス（＝大いなる作業）のなかでは、明らかに「途中経過」に当たるものです。

そして、それを描いたゲーテは、明らかにアルベディアン（アルベド主義者＝神秘主義者）でした。それに対してルベディアン（完成された錬金術師）である私は、赤化と訳され、太陽や黄金によって象徴される「ルベド」の内実を知っているのです。

そしてまた私は『ファウスト』の主人公（ファウスト）が紛れもなく錬金術師であることも知っています。

そのように「錬金術に従事する人間」が、物語の主人公であるならばです。その主人公は、ストーリーの終盤において「ルベド」に到達してこそ、かかる錬金術的文学に、真の完結性を与えることが出来るのではないか。私は、そのように思わずにはいられないのです。

ルベド的完結を持った「ファウスト」

かくして私は、右のような思いを持ってゲーテの「ファウスト」を読むことになるわけです。アルベドの情景のうちに完結を迎える「ファウスト」を。

そうだとすれば、私とその読書体験に対し、一抹の物足りなさを覚えるのは、まったくもって仕方のないことでありましょう。

そして、この物足りなさを埋めるべく、他ならぬ私自身の手によって「ファウスト第三部」が執筆されました。ようするに私は、何としても「ルベド的完結をもったファウスト」を、この手で書き残したかったのです。

そして、私はその仕事を何とかやり遂げました。

もっとも、ゲーテの「ファウスト」が、彼の人生後半をフル活用したライフワークであるのに対して、

私の「ファウスト」は、二十代の終わりごろから、三十代の初めに書いた一作品であるに過ぎません。

しかも、私の「ファウスト」は、今のところ草稿の状態で放置されています。よって当然のことながら、不備などところや未熟なところが満載の「ファウスト」であると言わざるをえません。

しかし私は断言します。実際に皆さんにお見せする前には、必ず、私自身による、大規模な推敲作業を挿入すると。そして、それによって、ある程度の水準まで、作品の完成度を高めることが出来るでしょう。

最低限の「前提紹介」

さて、その推敲作業に取りかかる前に、読者に対する最低限のマナーとして、私はまず要約版の「ファウスト第一部」と「ファウスト第二部」を提供することにしました。何の前提もなしに、いきなり「ファウスト第三部」だけを発信するのは、さすがに不親切の極みでしょうから。

いや、もちろん一つの言表として「どうかゲーテのファウストを読んでから、私の『第三部』に接してください」とお願いすることは可能です。私にとっても、これが一番楽な「布石」であることは間違いありません。

しかし、ゲーテの「ファウスト」は余りにも長大な作品ですし、決して理解しやすい作品でもありません（そこがゲーテ版「ファウスト」最大の魅力であり、極上の滋味でもあるのですが）。

それを、まるで責任放棄するかのように、そのままの形で、読者へお勧めするのは如何なものかと思っただけです。

ストーリーの簡素化

その点で言えば、正道版の「ファウスト」は、ごく短いものです。ざっくり言って、本家の十分の一ぐらいしかありません。なにしろ「舞台の前曲」もなければ「アウエルバッハの酒場」ないのですから。

しかも、私はストーリーの整合性に、人並みならぬコダワリを持っています。

つまり本然的なタチ（性質）として、私は「何がどうしてこうなったのか」という流れを、明確なものとせずにはいられない人間なのです。対するゲーテは「詩としての美しさ」が先ずありきなので、ストーリーの整合性に関しては、あまりコダワリがないようなのですが。

こういう事情があるため、私は今回、そのような「ストーリー明確化、整合化」を目指したアレンジを、現実に敢行してしまいました。

そのため原作になかった場面を加えたり、話の前後を入れ替えてしまったような箇所もあります。

これには非難の声を浴びせる読者もいるでしょう。とくにゲーテファンの方でしたら、そこに一言ぐらひは、文句を言わずにはいられないでしょう。ゲーテの聖域を汚した、と言われれば、まさにその通りのことを、私はしたのですから。

しかしながら、その乱暴な「ストーリー明確化、整合化」によって得られたものも、確かにあったと思

うのです。とくに、

「ゲーテ版の曖昧な表現により、本来的な『ファウスト』のストーリーが、よく分からなくなってしまった」というビギナーにとっては、これはちょっとした福音ですらあると思います。

そういう訳ですから、この改変に関しては、暖かい眼差しで見守っていただければと思います。

※ この文章は、もともと「第一部」の前書きとして書いたもので、文書変造に関しては、主に「第一部」のそれについてのみ当てはまります。「第二部」では、それなりに丁寧な要約を行っています。

国民感情のコントロール？

ここを何を書くか迷っていたときに、テレビから驚くべき言葉が聞こえてきた。立憲民主党の岡田克也幹事長によるもので、自分たち政治家は「国民感情をしっかりとコントロールしていかないと」不具合が生じるというのである。

これはもともと、高市総理による台湾有事をめぐる話題から発したものだ。あの首相の答弁をめぐり、「一部の国民の中には『よく言った』と、中国に対して厳しく言ったということで評価している人たちもいる」

と語った岡田は、それでも日中双方がうまく折り合うよう、自分たちが「国民感情をしっかりとコントロールしていかないと」いけないと言って話をまとめたのである。

しかしながら、日本は憲法上「国民主権の国」である。つまり権利の主は国民にあるのであって、その主の感情が、政治家によってコントロールされる謂れなどは、まったくないのである。

岡田の考えは、国民の知識と感情を、無理やりコントロールすることで「ようやく」成立している中国共産党の思考態度そっくりである。さすがは、日中友好議員連盟の副会長だけはある。

日中友好議員連盟——この組織は、米国の国防総省が「日本の世論や政策を中国側に有利に動かすための機関」と断じた組織である。

これは要するに「この組織は世論誘導を目的としたスパイ集団である」ということであり、さらに敷衍して言えば、この組織に属する岡田は、中国のスパイだということである。

そして、この岡田を幹事長とする立憲民主党も、その活動実質を眺めれば、もはや中国のスパイ組織の日本支部であると思わざるを得ない。近頃は立憲民主党不要論が活発であるが、私もまたその主張に一票を投じる者である。

戯曲「ファウスト第二部」下

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
